

指揮のないエコシンフォニーアンサンブル

ENSEMBLE PASTORALE

ブラームスと愛の子守唄

2025.10.12

プログラム

◆ブラームス / 「5つの歌曲」 作品49より第4番
「子守唄」 (弦楽四重奏版)

Johannes Brahms Five Lieder, Op. 49, No. 4
“Wiegenlied” (Quartet Version)

◆ブラームス / 『ピアノのための6つの小品』 より第2番
「間奏曲」 イ長調 (十一重奏版)

Johannes Brahms Six Pieces for Piano Op. 118, No. 2
“Intermezzo”
in A major (Un-dectet Version)

INTER MISSION 休憩

◆ブラームス / 交響曲第2番
二長調 作品73 (十一重奏版)

Johannes Brahms Symphony No. 2
in D major, Op. 73 (Un-Dectet Version)

Johannes Brahms 1833 - 1897

ヨハネス・ブラームス

ヨハネス・ブラームスはJ.S.バッハ、ベートーヴェンに並び、ドイツの三大作曲家(3Bとも称される)の一人で、クラシック音楽において最も重要な作曲家の一人です。当時のヨーロッパのトレンドであったワーグナーやリストの劇場型で自由奔放な音楽からは距離をとり、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、といった古典派の巨匠たちの形式や技法を保守的に継承し、秩序、内面的、精神的な美を大切にしました。今回は世界の三大子守唄の一つと呼ばれている「ブラームスの子守唄」を通して、ブラームスの世界観を探求していきましょう。

ブラームスの子守唄

1858年、当時25歳のブラームスはハンブルクの近郊で4人の少女と親しくなり、ブラームス指導のもと女性四重唱のグループが生まれました。定期的に無報酬で指導したこの四重唱は、最終的に40人まで増え、ハンブルク女性合唱団と呼ばれる合唱団になりました。初期メンバーの一人であったベルタ・ファーマー(当時17歳)は、ウィーン近郊出身の陽気な性格のウィーン娘で、ブラームスとは特に仲が良かったとされています。ベルタとブラームスの間に恋心があったのかは定かではありませんが、その後ベルタは裕福な実業家と結婚しウィーンに在住し、生涯にわたり夫婦ともにブラームスのよき友人、理解者となりました。

ベルタが合唱団にいた頃、よく口ずさんでいた古いオーストリアの民謡がありました。

「S is Anderscht」(それは違うの)という若い女性の恋のすれ違いを表した詩で、地域ごとに方言や歌詞が若干変わります。

「それは違うの。みんなが言うようなことじゃない。
私はあの人を愛していないなんて、そんなの嘘。
けれど、運命はそうさせてくれなかった。
今は静かに、心にしまっておくの。」

ブラームスが35歳の頃、ベルタの第二子出産の知らせを受けてこの子守唄をベルタ夫妻に贈りました。夫妻に宛てた手紙の中でブラームスは次のように書いています。

「これは小さき者のための子守唄です。歌っている間、きっとあなたには愛の歌が聴こえるでしょう。」子守唄のメロディーが歌われるその裏で、右手のピアノパートの旋律にベルタが口ずさんでいた古いラブソングを忍ばせたのでした。ベルタ夫妻の赤ちゃんは健康な男の子で、Johannes(ヨハネス)と名付けられました。

少年時代と人格形成

ブラームスは1833年5月7日にドイツのハンブルクにて17歳差の姉女房夫婦の次男として生まれました。一家は大変貧しい労働階級家庭でした。市民劇場のコントラバス奏者の父の影響で幼少期から弦楽器の勉強を始めますが、7歳の頃に自らピアノを学びたいと両親に伝え、本格的に学び始めました。12歳頃から16歳頃までは家計を助けるために、夜は荒々しい男たちと娼婦たちで溢れる酒場や娼館でピアノ演奏の仕事をし、昼間は学校で学び、空き時間で熱心に音楽の勉強をする生活が続けました。このような環境は少年の心を深く傷つけ、仕事の辛さに度々涙し、強い嫌悪と屈辱を感じていたと伝えられています。

故郷ハンブルグで腰を据えて家庭を築きたいと望んでいたブラームスは、後にハンブルク交響楽団の音楽監督への就任のチャンスが何度かありましたが、彼が貧困街の出身という理由から、その望みは度々閉ざされました。少年時代のトラウマからか、後に何度も結婚のチャンスがあったにもかかわらず、自ら別れることを繰り返し、生涯独身で過ごしました。また、貧困への偏見に対する強い反骨心を持ち、後に名声と富を得てからは、自ら若い音楽家達の経済援助をしたり、匿名での寄付活動を熱心に行うようになりました。

生涯の友との出会い

20歳まではピアノ教師としてレッスンをこなし、劇場での伴奏や編曲の依頼などで日銭を稼ぎながら地道に作曲を続けていたブラームスは、オーストリア帝国に対してハンガリー独立戦争に参加した政治犯としてアメリカへ亡命した天才ヴァイオリニスト、エドアルド・レマーニと出会いました。レマーニはハンブルクを訪れた際にブラームスを伴奏者として任命して、二人はヨーロッパ中を演奏旅行する事となりました。二人がハノーファーを訪れた際、ハノーファー王立宮廷管弦楽団のコンサートマスターであったヨアヒムと出会いました。若干22歳のヨアヒムは、2歳年下の美青年の天才性を瞬時に理解し、「今後レマーニと離れるようなことになったら、すぐに自分のところに来て欲しい。」と伝えました。ハノーファー宮廷での演奏会が控えていたにもかかわらず、レマーニが政治犯であることが知れ渡り、二人には国外退去処分が言い渡されました。二人が次にワイマールを訪れることを聞いたヨアヒムは、以前、ワイマール大公国宮廷楽団のコンサートマスターとして、大作曲家であり、ピアニストのリストとの親交があったことから、ブラームスに巨匠に会うことを勧めて推薦状を持たせました。

ブラームスと会ったリストは、瞬時に無名の若き才能を見抜き、自分が立ち上げようとしている新ドイツ楽派の一人として、作品に自由なスタイルを取り入れるなら、惜しみない支援をすると申し出ました。莫大な富と名声を持ち、人々から教祖のように崇められていた巨匠からの申し出にも関わらず、若いブラームスは妥協することをしませんでした。ブラームスの態度はリストとの間に溝を深めていき、彼と関係を築きたかったレマーニは怒りを爆発させてブラームスを伴奏者から解雇しました。一瞬で収入を失ったブラームスは、ヨアヒムの言葉を思い出し、ハノーファーへと戻りました。

恩人達との出会い

ハノーファーで親友との演奏会を次々と成功させて資金を得たブラームスは、周りの勧めもあり、ロマン派の巨匠シューマンへ会いにデュッセルドルフを訪れました。ブラームス自作のピアノ作品を聴いたシューマンと妻の天才ピアニスト、クララは、この若干20歳の若者が只者ではない事を見抜きました。シューマンは大手出版社にブラームスの事を推薦し、自身の編集する雑誌でも彼の記事を書き、ブラームスの名声は瞬く間にヨーロッパを駆け巡りました。シューマンの取り計らいでブラームスはライプツィヒに出向き、才能に懐疑的な出版社と音楽関係者の前で自身の作品を演奏しました。ライプツィヒの音楽会は20歳の若者の虜となり、ブラームスは初めて出版謝礼を受け取りました。翌年1854年の1月にシューマン夫妻はハノーファーを訪れ、ヨアヒムと共演をしました。ブラームスも聴いたこの演奏会が大成功を収めたわずか1ヶ月後、恩師がライン川へ身を投げて自殺を図ったとの一報が届きました。

恩師との別れ

シューマンがデュッセルドルフ管弦楽団の音楽監督として過ごした1850年からの4年間は、シューマン一家にとって困難に満ちていました。クララは夫を支えながら6人の子供の育児に励みました。芸術家としての才能に疑問を呈す人は誰もいませんでしたが、シューマンの穏やかで極めて内向的な性格は、指揮者としてデュッセルドルフの人々を満足させることができませんでした。クララの日記には「ロベルトはオーケストラに対して静かすぎる」と記しています。陰口や嘲りはやがてオーケストラ全体に伝染し、彼の一挙手一投足に対して嘲笑をするようになりました。シューマンは穏やかに対応をしていましたが次第に体調を崩し、不眠や、常に不協和音が聞こえる聴覚異常に苦しむようになりました。体調は悪化の一途をたどり、「天使が美しい音楽を奏でている」と語った直後、幻聴が「悪魔の合唱」に変わり、恐怖に襲われた翌日の1854年2月27日の早朝、家族が寝静まる中家を飛び出し、衝動的にライン川にかかる橋の上から濁流へと身を投げましたが、偶然居合わせた船乗りたちに救助されました。この時クララは6ヶ月の小さな命を宿していました。シューマンは自ら精神病院での治療を望み、入院後は死の直前までクララとの面会が許されませんでした。2年間もの治療にも関わらず、体調は回復する事なく1856年7月29日に愛する妻に手を握られながら息を引き取りました。

許されざる恋

ブラームスはハノーファーに滞在中の1854年の3月初旬に恩師の自殺未遂の一報を聞き、急いでデュッセルドルフへと向かいました。3〜4週間ほどクララと子供達と共に滞在し、傷心の妊婦に代わり、家事、子供の世話、手紙の代筆など、実務的にも、そして精神的にもシューマン一家を支えました。1854年3月10日付のクララの日記には次のようにあります。「ヨハネスが来てくれた。彼の優しい言葉と静かな存在は、私の心に光を取り戻してくれた。」6月11日には末の息子が誕生し、クララの親しい友人であった亡きメンデルスゾーンにちなんで、フェリクスと名付けられました。クララには7人の子供の養育費とシューマンの入院費の負担が重くのしかかり、この経済的困難を乗り切るために産後からたった4ヶ月の10月から演奏ツアーを開始しています。シューマン家には複数の信頼できるメイドがいて育児を助けていましたが、ブラームスは度々両親が不在の子供達を訪れ、その様子を恩師やクララに手紙で伝えました。そのような状況の中、ブラームスにはクララに対する特別な感情が芽生えて、自分の立場に苦しみました。シューマンの死後もブラームスとクララは結ばれることはなく、生涯にわたって良き友人として友情関係を保ちました。その後ブラームスには度々恋や結婚のチャンスがありましたが、婚約の直前で別れを申し出たり、失恋する度に14歳年上のクララに会いに行くということが繰り返されました。クララとブラームスの間での手紙のやりとりは生涯で1,300通以上あったとされ、現在は850通ほどが残されています。

ピアノのための6つの小品/Six Pieces for Piano Op. 118

ブラームス60歳、クララが74歳の時に作られたピアノのための6つの小品 op.118は、ブラームスの人生の最後から2番目の作品で、クララに献呈されています。ブラームスはクララへの手紙の中で次のように書いています。「あなたのためにいくつかの小さな曲をまとめました。それらは、私がこれまで語らずにきた想いの名残です。」

この作品には6つの小曲があり、今日演奏する2番は6つの中で最も有名で演奏される機会の多い曲です。2番の始まりでは子守唄のモチーフが使われています。ここで使われている子守唄は何を意味するのでしょうか。

第1番の出だしは「C-B-A-A ドシララ」で始まります。シューマンのピアノ協奏曲などの出だしで使われている「C-H-A-A ドシララ」はクララを表していると夫であるシューマンが公言していたことから、ブラームスは少し濁してクララに呼びかけていることが考えられます。

そして調性は曲順を追うごとに狙っているかのように下降していきます。

- 1番 C-dur - amoll,- Fdur,- Adur（調性が安定せず無理やりAdurへ向かう。）
- 2番 Adur
- 3番 gmoll
- 4番 fmoll
- 5番 Fdur
- 6番 esmoll（→Smollとも読める。esはシューマンを意味するのではないか。）

6番を聴くとき、静寂の中で魂がこの世を離れる瞬間に立ち会っているかのように、もしくは自らの魂と向き合うかのように感じてしまいます。調性の選択が意図的であり、esmollがシューマンを意味するのなら、恩師へのレクイエム(鎮魂歌)または懺悔の意味が含まれていると考えることができるかもしれません。

クララは日記の中で6番について次のように書いています。「これは、彼(ブラームス)の別れのように聞こえた。」ブラームスの答えは次のようなものでした。「何も求めていません。ただ静かに存在することが、私にとっての幸福なのです。」ブラームスが表したのは別れではなく、クララや自分のありのままを受け入れることで見いだすことのできる永遠性でした。

クララは晩年、第2番を好んで演奏しました。手紙で次のように書いています。「とくに第2番、それはあなたの心のやさしさそのものです。まるであなたの手が私の肩にそっと触れているかのように感じました。」2番に使われている子守唄は何を意味するのでしょうか。楽譜にあるブラームスの指示には「*teneramente* 優しく、慈しむように」とあります。それは母が赤子へ与える無償の愛のように、ただ慈しみ、労り、全てを受け入れる慈愛を表しているのかもしれません。

交響曲第2番 / Symphony No. 2

ブラームスは20歳の頃にベートーヴェンの交響曲第9番と出会ったと考えられています。その交響曲があまりにも偉大だったため、当時の作曲家達にとって安易に交響曲に手を出すのは危険だと考えられていました。実際にブラームスはベートーヴェンの10番と呼ばれるに相応しい交響曲を目指して、交響曲第1番の完成までに21年間を費やしています。今回演奏する交響曲第2番はブラームスが44歳の頃、1877年の夏から秋にかけてオーストリアのペルチャッハにて約4ヶ月で完成されて、完成から約2ヶ月後にウィーンフィルによって初演されています。

ブラームスは交響曲2番を作曲する際、ペルチャッハからクララに手紙を書いています。
「ここはあまりに美しくて、仕事などしたくなくなる。もし君がここにいたなら、(あまりに美しくて)僕はきっと作曲などできなくなってしまうだろう。」

第1楽章の第二主題のチェロが奏でるメロディーは、悲しく哀愁漂う子守唄を彷彿させます。もう一度、子守唄に隠された古いラブソングの一部を書きたいと思います。

「私はあの人を愛していないなんて、そんなの嘘。
けれど、運命はそうさせてくれなかった。
今は静かに、心にしまっておくの。」

ブラームスの田園交響曲(パストラーレ)と言われる交響曲第2番に触れる時、明るく澄んだ美しい大自然の風景が目の前に広がるかのような想いがしますが、ふと聞こえてくる悲しい子守唄の旋律にはブラームスの哀愁の想いが込められているのかもしれません。



